

文化的身体を育む生活体験と体験学習の意義

小原達朗（教育実践総合センター）

1. 身体性の諸相

ヒトの身体のもっとも際立った点は文化性を有しているところであり、これを「文化的身体」として捉えることができる。身体文化論的な視点から身体を持つ特性を5相に分類して捉えることができる（図1）。唯物論的捉え方ではないが、生命体としての「からだ」が「生理的身体」であり、他の特性の中心に位置づけることができる。その身体は運動やスポーツをする「運動スポーツ的身体」であり、広く仕事や職業としての生産活動および日常生活を営む「生産・生活的身体」として捉えることもできる。また、その身体は孤立していながら他者との関係性を持つために機能するものであり「社会的身体」の一面を持っている。これらの身体性の諸相のひとつは、その置かれた状況によって主であったり従であったりするが、相互関連的に影響しあうものである。

中でも文化的身体は、運動やスポーツとも類似性を持ちながら、労働や日常生活の挙措・動作に根ざし、世代を超えて地域や社会に開かれた側面をもっており、特定の生活体験や祭り体験などによって形づくられるものである。その意味から、運動スポーツ的身体、生産・生活的身体、社会的身体を包含しており、結果的に形態や姿勢あるいは身体諸機能の変化を生じさせている点で、生理的身体にも影響を与えているといえる。

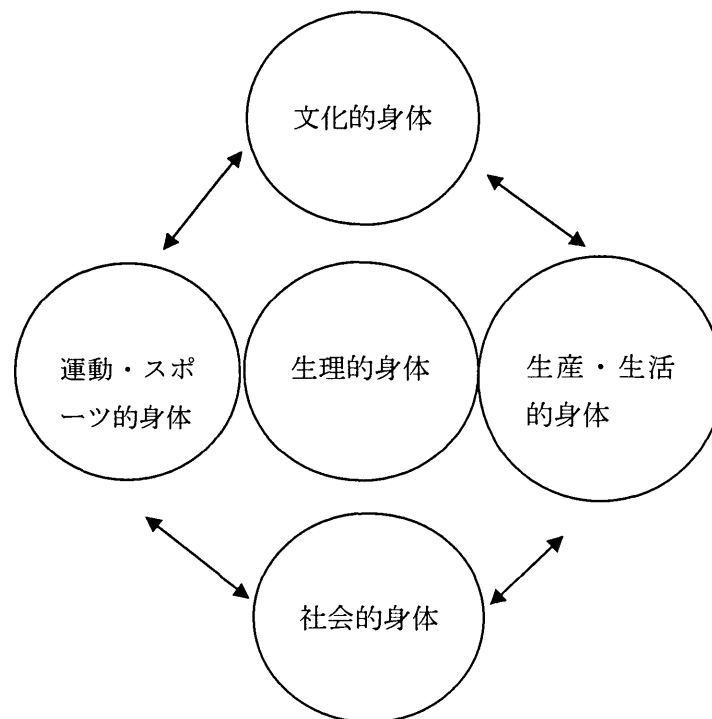


図1 身体性の諸相

2. 文化的身体の構造

文化的身体における文化とは、一つには芸術、宗教、科学などの知的・精神的な産物があげられる。また、人と人、人と物とのかかわりから生ずるコミュニケーションの基礎となることばを始めとした人間関係能力もそうであり、箸の持ち方、挨拶、礼儀、マナーなどの生活慣行や社会規範などの社会を維持・発展させる役割もあげることができる¹⁾。

また、文化的身体に限定してその独自性を「祭り」を例にして類型化してあげるなら、太鼓や踊り・立ち回りなどの身体技法としての動作性に加えて、動く快感性、達成感、克服力、根源的生命発現性などの精神性（齋藤 孝²⁾は、伝統的身体文化における身体の精神性を「腰・肚文化」と位置づけている）を抜きにしては考えられない。さらに、自己表現と他者評価、協同と一体性、発散・開放性など表現することで成り立つ開かれた身体としての関係性も文化的身体の独自性としてあげることができる³⁾。

このように文化の中にある知的・精神的要素、人間関係能力、生活慣行や社会規範性と文化的身体のもつ独自性の類型化から文化的身体は、文化の動作的側面を「身体技法」として、文化の精神的側面を「腰・肚文化」として、そして文化のもつ関係性の側面を「表現文化」という3本の柱によって構成されていると捉えることができる(図2)。

一方、日常の挙措・動作、労働・生活体験、祭りや踊りなどの身体技法について運動学的視点から分析すると身体部位に関する文化性は「腰・肚」だけでなく「膝」の文化であると捉えることもできる。「腰・肚」は、「腰がすわる」「肚をくくる」など腰と肚が身体の中心的な部分としてだけでなく、むしろ精神の定まるところとして伝統的身体文化の中では位置づけられてきた²⁾。このように「腰・肚文化」が精神的な倫理基盤としての身体を意味するのに対し、「膝」は、「膝の送り」「膝が割れる」「柔軟な膝使い」などの例に見られるように必ず具体的な膝の運動として捉えることができる。腰・肚の備えも「中膝」での安定した膝の身体技法のうえに成り立っていることは、各国の踊りや労働の姿勢、スポーツの構えを見れば明らかである。例えば、布団や物の上げ下ろしは腰を曲げるよりは上体は起こして膝を屈曲する方が安定し力も出せる。また、餅を杵でつく場合にも前後に開いた脚が中膝になっていなければならない。中膝は、棒膝に対して方向転換を容易に広範囲にし、静的にエネルギーを保持し、動的には推進力発現の中心部位ともなる。安定的で柔軟な膝の動きは、それがそのまま「機能的な美しさ」として表現文化にもつながっている。

以上の点から文化的身体性における身体は「腰・肚」を支える「膝」の役割が重要であることが指摘される。その意味から文化的身体は、「腰・肚・膝文化」として構造化することができる(図2)。さらには、生活体験による身体づくりは、膝の動きや使い方に視点をおいておく必要があるだろう。

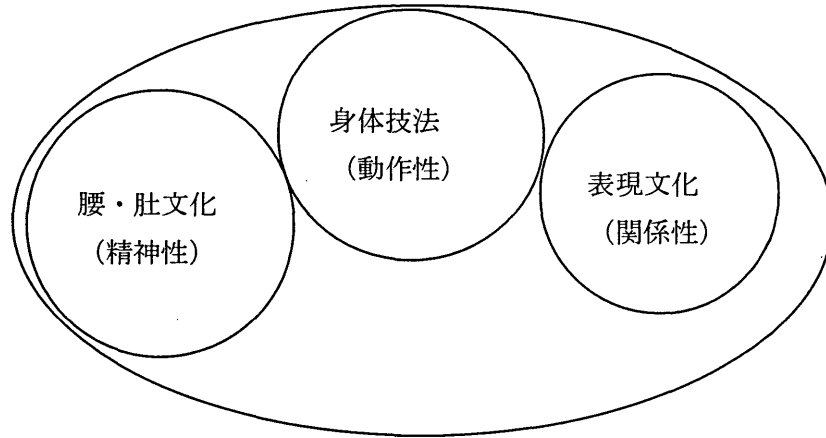


図2 文化的身体の構造

3. 文化的身体(腰・肚・膝文化)に関わる生活体験と学習

生活体験が身体性にどのように位置づけられるのかを明らかにすることによって、腰・肚・膝文化の学習概念も明らかになると考えられる。身体性の諸相において述べたように文化的身体は、運動やスポーツの合理的あるいは美的な動きとも関連し、労働や日常生活の挙措・動作とも関わりを持っており明確に区別されるものではない。その意味では、運動スポーツ的身体にも生産・生活的身体にもそれぞれの独自の学習すべき対象や内容が備わっていると共に各身体性と共有する学習の内容を含んでいるといえる。特に社会的身体は、他に開かれた身体づくり、他者との関係性づくりの点から協同性の形成、基礎生活体としての家族参加性、社会交流性（他の世代との交流）、社会規範の習得、社会的（地域）アイデンティティの形成などの内容を含んでいることから、文化的身体体験は、結果的に社会的身体における学習概念と重なる部分が大いにあるといえる。したがって、生活体験による学習機能は文化的身体に関わるところだけに存在するのではなく、他の身体性にも同様にあるいは類似の機能があることを認識しておかなければならない。

文化的身体（腰・肚・膝文化）に関わる生活体験と学習を考える場合の前提になるのは、まず生活体験をどのように捉えるかということである。生活体験の象徴的な活動として遊び、労働、ことばなどがあげられており⁴⁾、祭りはこれらが包含されたひとつの典型であろう。また、幼児においては遊びこそ生活体験の原型であるともいわれており⁵⁾、ここでは、遊び、労働、ことば、祭りを日常と多少異なった生活体験として取り上げることにした。

図3は、これらの生活体験による「腰・肚・膝文化」と学習の関係について構造的に示したものである。人は生活体験の中にある動作性によって「身体技法」を身につける。箸の持ち方、挨拶の姿勢、礼儀作法やマナーなどの「生活慣行」や運動学的な「膝使い」もそのひとつであり、決められた「型」は身体技法の典型であるといっている。個性の尊重

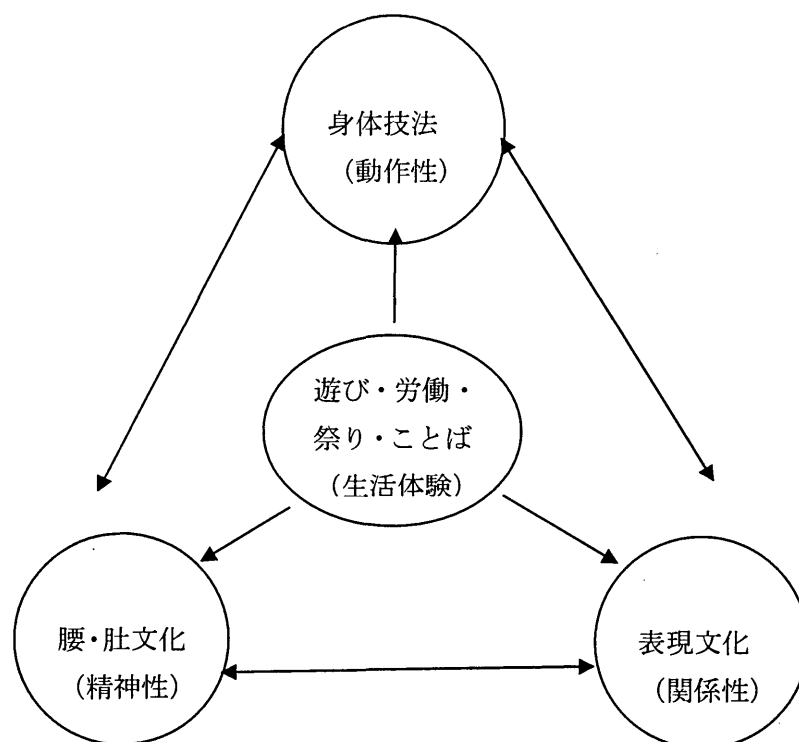


図3 腰・肚・膝文化に対する生活体験と学習の関係

図3は、これらの生活体験による「腰・肚・膝文化」と学習の関係について構造的に示したものである。人は生活体験の中にある動作性によって「身体技法」を身につける。箸の持ち方、挨拶の姿勢、礼儀作法やマナーなどの「生活慣行」や運動学的な「膝使い」もそのひとつであり、決められた「型」は身体技法の典型であるといっている。個性の尊重の今日にあって「型にはめるな」「型にはまるな」とはよく言われる、型にはめることで人間の自由が損なわれることを危惧する考えである。このことは一理あるところであるが、教育の原型は「型」を身につけることであり、生きていくための基盤となるものが「型」である。齋藤⁶⁾がいうように「型」は、自由を拘束するものではなく、「型」を持っている身体はそれが他者や社会との関係を作り上げる「拠りどころ」として働き、行動の広がりや自由度を増大させることになる。重要なことは、「型」に始まって「型」から飛び出すことであろう。ここに生活体験を単に体験に終らせない学習としての取り組みの必要性がある。

「腰・肚文化」は、生活体験の精神性によって育まれるものである。すなわち祭りや旧来の身体的労働などの伝統的身体文化においては腰や肚を精神の定まる場所として位置づけてきた⁶⁾。身体技法の習得段階では自らを律したり、がまんや忍耐も必要であり、克己心や努力も必要である。その結果として腰や肚の据わった精神性を身につけるのである。その好例が、「ふんばれる身体」「落ち着いた身体」「居場所のある身体」であり、その逆の例が「ムカツク」のでありムカツクがたまって「キレる」ことになり、そのようなメンタルタフネスのない身体が「かったるい」精神状態に陥るのである。

ことばや身体技法としての生活慣行は、コミュニケーションの基礎となる人間関係能力でもあり、ことばで表現して身体で表すことによって関係性が生まれる。つまり身体技法と腰・肚文化によって培われたものは、結果として「表現文化」に他ならないことになる。その点では「表現文化」についての学習すべき具体的な内容は明確ではないが、生活体験を通じた異年齢の仲間や大人との関係性の中で強固な自己決定の力を身につけたり、社会的身体でいうところの「開かれた身体づくり」が図られているものと考えられる。

以上の文化的身体に関わる生活体験と学習の面から身体と精神と関係の総合的な発達を考えると、生活体験は運動スポーツや生産・生活体験以上の学習概念を持つものといえる。

4. 文化的身体における身体技法

身体技法には、その社会で通用している一般的・普遍的な動作様式からある特定の状況下にある場合にしか通用しない動作様式がある。また、動作の獲得の容易なものから困難なものまでレベルの差がある。

日常生活における鉛筆の持ち方・使い方やひもの結び方などは、一般的で容易な動作であり、その気になれば自然に身につくものであり、仮に正しい方法でなくとも行為の目的は達せられるものである。したがって、文化的身体の形成にさほどの支障があるものではないように考えられるが、その正しさの程度が著しく低かったり、獲得すべき身体技法の欠落があまりにも多い場合には、文化的身体として脆弱であるといわざるを得ない。さらに、その獲得のために指導やしつけをされることに必要性を感じなければ不満を抱くことにもなりかねない。

一方、祭りで舞ったり特別な楽器を演奏する場合や現代的生活での日常的な空間や活動では体験の稀な行為などは、特定の状況下での困難で獲得に時間や身体的・精神的労力を要するものである。それがあるからこそ獲得した時の達成感や自己肯定感には大きなものがあり、身体技法の上でも精神性（「腰・肚文化」）及び当然行われるであろう指導者との関係性や自己表現の上でも文化的身体として高く位置づけることができる。

このように点から身体技法の獲得過程やレベルをもって、培われた文化的身体を眺め、評価することも可能であろう。

参考文献

- (1) 伊藤俊夫 「生活の基礎である文化の伝承」 社会教育 5月号 14-16 2002年
- (2) 齋藤 孝 「身体感覚を取り戻す -腰・肚文化の再生-」 NHKブックス 2002年
- (3) ヘニング・アイヒベルグ 「身体文化のイメージーション」(清水 論訳) 新評論
- (4) 南里悦史 「改訂 子どもの生活体験と学・社連携」 光生社 2001年
- (5) 横山正幸・猪山勝利・正平辰男 「子どもの生活を育てる生活体験学習入門」 北大路書房 1995年
- (6) 齋藤 孝 「子どもたちはなぜキレるか」 ちくま新書 1999年